連載・第9回

都市の緑
3 表 彰

緑がつなぐ町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:斎藤夕子　photo:坂本政十賜

［第23回］

緑化技術コンクール
環境大臣賞:緑化施設部門

那覇市本庁舎

1965年に竣工した旧庁舎の老朽化に伴い、2012年に新設された「那覇市本庁舎」。「“みどりあふれる庁舎”をみんなでつくる」をテーマに、地上12階、地下2階、塔屋1階建ての建物が全面緑化された。竣工から12年を経た2024年、建物の壁面、屋上、テラスや中庭に植栽された草木が成長し、市の景観計画において「亜熱帯庭園都市」を掲げる那覇市に相応しい景観を形成するようになったことから「緑化技術コンクール」に応募、見事、環境大臣賞を受賞した。

2012年に竣工した「那覇市本庁舎」

本庁舎入り口に聳えるガジュマル。旧庁舎時代から市民に愛されてきたシンボル的存在

旧庁舎から引き継がれたヒカンザクラ。庁舎東側の歩道沿いに移植されている

本庁舎の意匠・構造設計を行ったのは、沖縄県内の公共建築や大型商業施設、ホテルやホールなど、多くの実績をもつ株式会社国建(クニケン)、設備設計は株式会社環境設計国建が担った。大型台風が頻発する沖縄県において、とくにその影響を受けやすい建物の緑化に関しては風土を知り尽くした知識と経験が求められる。本庁舎においても、そうした知見が遺憾なく発揮されたかたちだ。

強風から緑を守る「ワイヤーメッシュカゴ」を開発

国建代表取締役社長の石嶺一さんと建築設計部の高江洲尚さんに案内されて向かったのは、本庁舎対面にある複合型施設「パレットくもじ」。1991年に沖縄県初の市街地再生事業により竣工した同施設を手がけたのも国建(株式会社アール・アイ・エーとのJV)で、この屋外階段から本庁舎の全体像がよく見えるのだ。

本庁舎を俯瞰して、何よりも特徴的に感じるのはその軽やかさだ。建築面積4962㎡、高さ54.4mのRC造、地上から中層階までが階段状にセットバックしながら12階まで伸びるボリュームをもちながらも、外壁全体が縦横の白いルーバーで構成されていることで、まるで巨大なカゴのような透け感がある。そして、ルーバーの隙間からは鮮やかなグリーンが溢れ出し、直線で構成されたソリッドな外観に、有機的で穏やかな、親しみが感じられる表情をつくり出している。

「台風の常襲地域である沖縄県では、強風対策が何より重要です。とくに風台風で潮を被ってしまうと、植物が枯れて茶色くなってしまうんです」と高江洲さん。本庁舎でも竣工2年目に風台風の影響を受けたという。「ただ、本庁舎では壁面緑化の植栽周りに〈ワイヤーメッシュカゴ〉を用いたことで、強風により植物が飛散するリスクを低減しています」と教えてくれる。

では、ともかく実物を拝見しようと地上に降り、本庁舎を訪ねる。エントランスに聳える2本のガジュマルは旧庁舎時代から樹齢を重ねる大木で、沖縄らしさが強く印象づけられる。2月半ば、濃いピンク色の花を咲かせているヒカンザクラも旧庁舎から移植したものだ。この他、新庁舎として新たに植栽した植物は、高木(カエンボク、シマトネリコ、ジャボチカバなど)25本、中木(ハイビスカス、ヤコウボク、ヘリコニアなど)329本、低木(サンダンカ、スギノハカズラ、ジンジャー類など)1万2129本、地覆類(ヤブラン、イワダレソウなど)2万3308本におよぶ。建物の屋上や壁面の他にも、敷地内には多くの植栽が設けられ、涼しげな木陰を形成している。

壁面緑化におけるポイントとなる「ワイヤーメッシュカゴ」は、板状のワイヤーメッシュを折り曲げて立体的にしたもので、ルーバー内のバルコニーに植栽されたブーゲンビレアやアリアケカズラなど、登攀しながら縦横に伸びるつる性植物を囲うように配されていた。

強風から、植物の幹と枝を守るために開発された「ワイヤーメッシュカゴ」。外観を特徴づけるルーバーと、ワイヤーメッシュよりも内側のバルコニーに植栽を設けたことでメンテナンスを容易にしている

ワイヤーメッシュに守られた植栽が、建物から溢れるように枝葉を伸ばす。ピンクの花は市花でもあるブーゲンビレア

強風による枝葉の飛散を抑制すると共に、たとえ葉が飛ばされても、幹や枝が守られることで、緑の早期回復にも効果があるという。

階段上に張り出したテラスや屋上緑化においても、強風の影響を考慮し、とくに高層階部分ではハマニンドウなど、風や潮に強い海浜性の植物を選定して植栽している。なお、竣工から12年の間には、とくに草本類で自然に遷移したものもあるが、緑の量感は安定し、あまり手をかけなくても順調に生育しているそうだ。

また、本庁舎の佇まいをさらに特徴づけているのは5階以上の高層階中央部に設けられた緑の吹き抜け空間だ。吹き抜けの周りに、各階に植えられたポトスがカーテンのように垂れ下がり、まるでリゾートホテルのようなゴージャスさがある。5階エレベーターホールから吹き抜けに面しては、スパティフィラムや葉付きの多いジンジャー系の植物が植えられた花壇も設けられ、同階にある市長室などを訪れる来訪者を圧倒的な緑が迎えてくれる。

じつは、同様の緑のカーテンは、1975年に沖縄国際海洋博覧会にあわせて開業した「ホテルムーンビーチ(現ザ・ムーンビーチ ミュージアムリゾート)」にも取り入れられたスタイルで、国建の名誉会長でもあった沖縄県を代表する建築家・国場幸房氏(1939–2016)の設計によるものだ。「本庁舎の意匠設計も国場さんが手がけたもので、一貫して沖縄らしさを追求する設計思想がありました」と教えてくれるのは石嶺さん。この吹き抜けは、まさに沖縄県の歴史と未来がつながれた空間ともいえそうだ。

「みどり」を「みんな」で「みらい」につなげる

建て替えられる前の旧庁舎時代にも敷地内には多くの緑が育ち、市花のブーゲンビレアやアマミヅタなどが建物を覆うなど、良好な緑化環境がつくられていた。それだけに、新庁舎建設にあたっても緑を残してほしいという市民の声は多かった。このことから、市では「緑の里親」制度を創設。既存のブーゲンビレアを123鉢に分け、市内の小学校や企業、市民らに「預かりボランティア」を担ってもらい、新庁舎完成後に移植している。アマミヅタも、元木を市内の公園に移植した他、挿し木苗1200本をつくり、市民や公共施設に配布、一部は新庁舎に移植した。「緑の里親」制度は、新庁舎のテーマでもある「“みどりあふれる庁舎”をみんなでつくる」の実践でもある。その他、敷地内にあったゲッケイジュやフクギ、ホウオウボクなども小学校や公園などに移植され、新たな土地に根付いているそうだ。

「緑の里親制度で預かってもらったブーゲンビレアの多くは、市民の皆さんの憩いの場としても利用してもらいやすい2階テラスの周囲に植栽しました」と教えてくれるのは、那覇市まちなみ共創部副部長の新里武督さんだ。また6階テラスには、庁舎入り口にあるガジュマルからの挿し木で育てた苗も植えられている。新旧通じて、那覇市本庁舎のシンボルとして聳え立つガジュマルだが、その樹齢は少なくとも、すでに60年を超えている。ガジュマルの樹齢は100年とも150年ともいわれるが、それを超えても、長年市民に愛されてきたガジュマルの遺伝子を残し、未来につなげていこうという試みだ。

那覇市本庁舎の設計においては、「“みどり”があふれる庁舎」「“みんな”とつくる庁舎」「“みらい”につたえる庁舎」という三つのテーマもコンセプトとして掲げられていた。緑を通じて、これらの基本理念を余すことなく実践してきた本庁舎は、竣工から12年経った現在、すでに那覇市を象徴する建物として、その存在感を示している。

ポトスなどのつる性植物が垂れ下がり、緑のカーテンをつくる吹き抜け

5階エレベーターホールから望む吹き抜け空間。風の影響が少ない花壇では、スパティフィラムが大きな葉と花をつけ、旺盛に育っていた

【取材協力】
[那覇市]
副市長・金城康也さん
総務部 部長・島袋久枝さん／副部長・大城敦子さん／
管財課 課長・大城修さん／管財課 主幹・大城亮平さん／管財課 主事・安里恭也さん
まちなみ共創部 副部長・新里武督さん
[株式会社国建]
代表取締役社長・石嶺一さん／
建築設計部 建築II部 部付部長 一級建築士・高江洲尚さん

建物が階段状にセットバックした「屋上緑化」部分には、刈り込みの手間がかからないイワダレソウなどの地被類や、強風に強い海浜性植物が植えられている

庁舎西側。新設工事に合わせて歩道を拡幅し、カエンボクとハイビスカスによる並木道を構成。日差しを遮る木陰をつくる

6階テラスに植栽されたガジュマルの幼木(中央)。花壇を囲んでベンチが設けられ、市民の憩いの場ともなっている

テラスでは、職員がプランターで花や野菜を育てる様子も。庁舎にかかわる職員らが緑化エリアに関心をもち、親しみをもって活用している